



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 精神障害当事者と非当事者のインタビュー・ナラティブにみる対話の可能性                                          |
| Author(s)    | 周, 冰竹                                                                       |
| Citation     | 大阪大学言語文化学. 2023, 32, p. 115-131                                             |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/91161">https://doi.org/10.18910/91161</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 精神障害当事者と非当事者の インタビュー・ナラティブにみる対話の可能性\*

周 氷竹\*\*

キーワード：精神障害、コミュニケーション、ポジショニング分析

根据厚生劳动省进行的患者调查，近年来精神疾病患者数量呈上升趋势，然而，精神疾病患者的社会形象普遍为负面，偏见和歧视依然存在。虽然既有的研究已经指出精神疾病当事者的经验的重要性，但聚焦于精神疾病当事者叙事的研究却为数不多（松田，2018）。其中，从互动社会语言学的视角对精神疾病当事者的叙述进行分析的研究几乎没有。笔者 Z（精神疾病非当事者）对两名精神疾病当事者 M 和 S 进行了采访，在收集到的访谈材料中分别选取了发话连锁自然以及不自然的数据，使用 Bamberg（1997）提出的定位概念对非当事者和当事者的沟通过程进行了比较和分析。本文致力于为精神疾病的当事者和非当事者在互动中应该采取什么样的态度来促进顺利沟通提供借鉴和参考。

研究结果如下：从数据 1 和数据 2 中都可以发现当事者和非当事者被定位为专家和新手。在数据 1 中，M 将 Z 定位为从未患过精神疾病的新手，然后将自己定位为经历过精神疾病的专家，并给出建议。M 还从专家角度判断 Z 将来没有可能患这种病，彻底将 Z 定位为与自己不同的人。在数据 1 中，Z 试图举出朋友的例子引发 M 的共鸣，但并没有起到效果，反而把话题从 M 身上转到了 Z 的朋友。为了寻求共情而提出共性的行为是黑岛（2013）在之前的研究中所描述的破坏当事者经验独特性的行为，这也许能说明为什么双方的差异在交流中不断扩大，从而使交流陷入僵滞。在数据 2 中，Z 和 S 分别从“被教的新手”和“教别人知识的专家”的立场进行互动，清楚地表达了他们的经验和立场之间的差异。例如，Z 清楚地提出反对意见，并提出 S 的解释与自己的想法的差异。Z 没有试图去寻找共同之处，而是通过保持不同的立场表达了对作为疾病专家的 S 的尊重，从而并构建了“被教的新手”和“教别人知识的专家”的平衡地位。

结果表明，为了促进沟通，在当事者和非当事者之间架起桥梁，我们不应盲目寻找共同点，而是应该创造一个尊重当事者经验的互动空间，并从对方经验感到好奇的新手的角度，认真听取作为疾病专家的当事者的叙述。

---

\* 从精神疾病当事者和非当事者的访谈叙事中看对话之可能（周冰竹 ZHOU Bingzhu）

\*\* 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

## 1 はじめに

最新の厚生労働省の調査（2019）<sup>1</sup>によると、統合失調症、気分障害などといった精神障害のある人の人数は206.8万人に及び、前回（2014年）<sup>2</sup>の188.9万人に比べ、増加傾向にある。精神障害者に対する社会的なイメージは一般的にネガティブである。

1980年代から当事者の存在を主張する声が上がリ、精神病院に象徴される既存の精神医療制度と、世間に広まり再生産される偏見や差別に対する抵抗が様々な形で行われてきた。具体例としては、吉田（1980）、谷中・藤井（1988）、全国精神障害者家族連合会・全国精神障害者団体連合会（1993）などが挙げられる。このような活動や報告を通して、マジョリティ文化によって排除されていた当事者の声が次第に聞こえてくるようになった。また、北海道浦河市にある精神障害者のコミュニティ・浦河べてるの家は、精神障害者が自らの経験を「研究」という自助的な「当事者研究」を行い、当事者文化研究の新展開をもたらした（浦河べてるの家（2002）を参照）。

以上のように、精神障害当事者の存在と当事者によるナラティブを重視する傾向が確認できた。近年、非当事者とのコミュニケーションがケアになる可能性<sup>3</sup>が検討されてきたが、非当事者とのコミュニケーションを取り上げた研究はあまり見られない。コミュニケーションの可能性を探るには、実際の会話データを用い、相互行為まで微視的に分析する研究が欠かせないと考えられる。そこで、本研究は相互行為的社会言語学の視点から考察を行う。

本研究はインタビュー・ナラティブを分析対象とし、非当事者が共感を示そうとしたけれども発話連鎖が不自然になってしまったと思われる例と、連鎖がうまくいったと思われる例を取り上げ、会話参与者らの交渉するプロセスを分析する。それを通じて、精神障害の当事者と非当事者の円滑なコミュニケーションを促すために、相互行為の場でのどのような姿勢をとるべきか、を明らかにすることが本研究の目的である。研究目的を達成するため、以下の3つのリサーチ・クエスチョン（以下、RQと略）を設定する。

RQ① 相互行為の場で他者（精神障害の当事者、非当事者）との関係性で自己（もしくは他者）をどのように位置づけ、どのような交渉をしているか。

RQ② 発話連鎖が自然・不自然になった原因は何か。

RQ③ 当事者と非当事者の円滑なコミュニケーションを実現するため、非当事者がどの

<sup>1</sup> <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/17/dl/kanja.pdf>（平成29年、最終閲覧日：2022年9月4日）

<sup>2</sup> <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/14/dl/05.pdf>（平成26年、最終閲覧日：2022年9月4日）

<sup>3</sup> 森岡（2017）、宮坂（2020）を参照

ような姿勢をとるべきか。

以上3つのRQに沿って、当事者と非当事者のコミュニケーションの一端を解明し、円滑なコミュニケーションを実現させるための手がかりを示す。

## 2 先行研究と課題

### 2.1 精神障害当事者によるナラティブを重視する研究

松田（2018）は、近年の精神障害当事者のナラティブに焦点を当てる研究を内容的に大きく2つの種類に分けている。1つは、日常生活における困難、葛藤経験、当事者に関する活動への参加経緯などの実情を明らかにする、本質主義的な立場に基づく研究である（川岸他（2002）、片岡他（2003）を参照）。もう1つは当事者のナラティブを、環境と当事者との相互行為により動的に生成されたものとして捉える、構築主義的視点に立つ研究である（田中（2000）、北村（2004）を参照）。後者の研究は主に当事者にとっての「病」の意味変遷を通時的に考察した研究となっている。しかし、当事者と非当事者がいかに相互行為の場（今・ここ）で交渉するか、という共時的な構築プロセスを考察した研究は見当たらない。

### 2.2 当事者と非当事者のコミュニケーション

他者の経験を聞く際、私たちは常に共感を示すことで、相手への理解を試み、円滑なコミュニケーションを成り立たせる。共感を示す際の技法について、Heritage（2011）は仮定法的評価と並行評価があると述べている。前者は、語り手が語った経験と同じ経験をした場合に、聞き手が自分も同じように感じる（*feel the same way*）と共感を示す。後者は、聞き手が語り手と特定できない、似たような経験（*similar but deparicularized experience*）を示すことで、つまり特定できない共通性を示すことで共感を試みることである。ホルスタインとグブリアム（2009:118）は聞き手の「背景知」は語り手に「自分の行為や心情を探索して説明しようとするのを支援する計りしれないほど貴重なリソースとなる」と述べ、聞き手が語り手と共通の経験を引き合いに出すことは「両者の質問と回答がそこに焦点を結ぶような、具体的な準拠点を提供するのにはしばしば有効な方法」であると述べ、類似した経験、共通経験を引き出すことの有効性を唱えている。

語り手と同じ経験をした場合、無論自分も同じように感じるということは困難ではないと思われる。また、日常的出来事については、直接経験したことがなくても、ある種の共通性を持つ自分の経験を提示し、共感を示すのも比較的容易だと考えられる。ただし、災害や病気などの厳しい経験を持つ当事者と非当事者のコミュニケーションの場

合は、西阪（2013:114）が指摘するように、「ほんとうに共感を必要としているような発言に限って、それに対する共感を示すのが難しい」というジレンマがある。この点に関して、黒嶋（2013）は東日本大震災により避難を余儀なくされた人たちと全国各地から福島を訪れるボランティアたちとの会話例を分析し、共感の難しい局面において聞き手のとるべき姿勢について示唆を与えている。すなわち「経験の固有性を認めるやり方」である。具体的な方法は2つあり、1つは、「語られた内容を一般化して端的に稀有なものとして扱うやり方」、もう1つは「自分と相手に立場上の差異があることを認めるやり方」である（上述:138）。

本研究で分析する精神障害の当事者と非当事者によるナラティブは、上記のように、ともに共感を示そうとするデータであり、1つの発話連鎖が不自然な例で、もう1つは連鎖がうまくいった例である。

### 3 方法論

#### 3.1 ポジショニング分析

ポジショニングは社会構成主義を背景とした、位置づけを示す概念であり、会話参与者によって協働で作成されたストーリーラインの中で、参与者としての自己の立ち位置が客観的にも（間）主観的にも首尾一貫した形で会話の場に置かれるという、談話プロセスの概念の1つである（Davies and Harré 1990）。Bamberg（1997）はポジショニング分析を3つのレベルに分けている。すなわち、レベル1 語りの世界におけるポジショニング、レベル2 他者との相互行為におけるポジショニング、レベル3 その場その時の文脈を離れても成立する、社会文化的なポジショニングである。

インタビューという相互行為の場でのコミュニケーションの動的プロセスを考察するため、本研究は主にレベル2 相互行為の場におけるポジショニング、位置づけに注目し、分析を行う。

#### 3.2 ライフ・ストーリー法

ライフ・ストーリー法は、調査協力者と調査者のインタビューという相互行為を介して生成されるライフ・ストーリーを主要なデータとして、調査協力者の生活世界や社会的世界の持つ意味を探究する研究方法である。「何を語ったのか」という語られた内容とともに、「いかに語ったのか」という語られ方にも着目する（桜井 2002:28）。そのため、ライフ・ストーリー法は当事者と非当事者のコミュニケーションの行われ方を解明する本研究にとって有効であると考えられる。

### 3.3 データの詳細

本研究で用いるデータは2019年11月と2022年5月の2回に分けて収録されたものである。それぞれのインタビューでは、可能な限り自然な発話が得られるように半構造化の形を取り、インタビュー M、S の精神障害に関するライフ・ストーリーを語ってもらった。インタビュアー（Z）は、インタビューの2人とはインタビューの前に1度会った程度の関係である。録画はインタビューの負担が大きいと判断し、録音のみとした。1回目のインタビューの長さは2時間28分、2回目は1時間41分である。インタビュアー（筆者、Z）とインタビュー（M、S）の基礎情報は以下の通りである。

表1 インタビュー参加者の基礎情報

| 会話参与者         | 世代別 | 職業         | 性別 | 国籍 | 精神障害            |
|---------------|-----|------------|----|----|-----------------|
| Z（筆者、インタビュアー） | 20代 | 学生         | 女性 | 中国 | 無               |
| M（インタビューー）    | 40代 | 無職         | 女性 | 日本 | 10代の後半に統合失調症に罹患 |
| S（インタビューー）    | 40代 | ピアサポーター、学生 | 女性 | 日本 | 10代の後半に双極性障害に罹患 |

また、倫理的な配慮を行った上で、調査に協力してもらうことに対してインタビューの同意を得た。同時に、その調査の内容が精神障害に関するライフ・ストーリーについて聴きたい旨を明記したインフォームド・コンセントをとった。

## 4 データ分析

本節では、具体的にデータを分析する。「4.1.1」と「4.2.1」はRQ①に対応した分析であり、「4.2.1」と「4.2.2」はRQ②に対応した分析である。「5 考察」では、RQ①とRQ②に関する分析を踏まえ、RQ③に対しても考察を行う。

### 4.1 データ1の分析

データ1はインタビューの最後で、MとZが病気に伴う特徴について話す場面である。

#### データ1 病気に伴う特徴を話す（録音の2:12:29-2:13:46）

01. M: わたしもね ずっとだから病気にかかって 失語症で だからね
02. 言葉がね うまいこと喋れなかったのね 今もそうやねんけど
03. なんかうまいこと伝わってるかな: ってちょっと不安ですわん:
04. それはゆうときます

(2.3)

05. だから断片的にしか喋らない ん：そんなにね

06. つないで喋ることはできないから

07. Z: はい

08. M: うまいこと ん：

(8.5)

09. Z: 友達も 前回も言いました↑ 友達も統合失調症に になって＝

10. M: ＝あ (.) ゆうてたね↑

11. Z: ん：

12. M: そんなん 大学は一緒の子？

13. Z: 大学は一緒

14. M: あ：そうなんやん

(4.1)

15. え (.) それ (.) 学校いってます？ その人

16. Z: 今は今は行ってないです

17. M: いってない

18. Z: 今中国に帰りました

19. M: あ (.) そうなんやん

20. Z: ん ::

(2.1)

21. M: 大変やね

22. Z: ん：

(3.4)

23. M: もうこんなね 病気になったら一発やからね 気をつけてくださいね

24. Z さん

25. Z: はい

26. M: 大丈夫やと思う 芯がしっかりしてそうやから

#### 4.1.1 RQ ①に関する分析

まず、RQ ①に設定した「自己（もしくは他者）をどのように位置づけているか、どのような交渉をしているか」をみてみよう。

M はまず病気に罹り、自分が「うまいこと」「喋れなかった」(2) ため、不安を感じて告白した。ここで、M は「そんなに」(5) を使用し、喋ることの能力を「う

まい」「うまくない」に分類し、自分を「うまくない」方に位置づけている。続いて、「それはゆうときます」(4)に注目したい。補助動詞である「～ておく」は「ある目的のために予めある行為を行う」(庵他 2000: 70) という意味を表す。ここで M はうまく喋れないことを強調し、自らを否定され、批判されることが起きないように、先にインタビューという場に相応しくない、もしくはインタビュイーに対する期待に背く可能性があることを主張しつつ、意思疎通への不安を表し、相手の許可をとろうとしている。さらに、ここでは、M は単に自己を喋りが上手くない人として位置づけるだけでなく、自分の本来の能力とは関係なく病気により強制的にそうになっていることをも知らしめることで、自分自身の能力のプライドを守っている。それを受けて、Z は慰めるための発話などの不安を和らげる反応はせずに、長い沈黙 (2.3 秒) を用いて応えている。次の 5-6 行までは、わかってもらおうというアピールをする機能を持つ「だから」を用い、無反応だった Z に対して自分の状況をわかってもらいたい M の様子がうかがえる。前述のように、また同じく病気により喋れないが故に、喋らないという意味を反復し伝えている (5,6)。M の語りがいったん収束し、それに対する反応が期待される位置で、Z は「はい」(7) と短く応答した。同じ内容を 5 行目から繰り返している点を見ると、M は Z に何らかの反応は期待しており、Z がそれを行わなかったため、Z の行動が、M の期待に外れたものであったと考えられる。それに続く 8-9 行では、4-5 行で挟む 2.3 秒の沈黙と同じく、相当長い沈黙 (8.5 秒) となる。

病気の経験がない人が、経験のある人に向かって共感的な反応を示すのは難しいと思われる。9 行目で Z は自己を、病気の経験を語ることに準ずる者として位置づけ、「も」の入った発話で共通性の提示を開始し、Z は同じ病気を持つ友人を持ち出し、M と同一化する試みが見られる。ここで Z が同じ病気を持つ友人という共通性を示したのは、反応が求められる位置で、沈黙や「はい」などといった薄い反応よりも、共感的な反応を可能にする選択肢だと考えられる。その後、10 行目で M はポーズなくターンをとり、Z が以前に言及した友人の存在を覚えていることを明示している。続いて、Z は「ん:」のみで応答し、共感的な反応をするためさらに共通性 (例えば、友人もうまく喋れないなど) を追加しようとはしていない。したがって、M は Z が自分の友人の話をしていると受け止め、自分からターンをとり、問いをかけ、Z と「友達」との関係性、また、「友達」の現状を聞き、会話の軌道を変えている (12,15)。ここで一定の話題への関心が示されているものの、Z の回答への反応 (14,19) から、M は Z の話に対して「聞いている」ことを示す以上のことしていないように見える。2.1 秒の長い間をおきた後の「大変やね」(21) から見ると、「統合失調症の友人の行動を理解できる者」として友人に対する共感が見られると考えられる。

岩田（2013）は震災地で避難する人とボランティアの語りを取り上げ、語りの中での共通性の提示は「自分のことを話す行為」で、「共感の権利の主張であることが伝わるように組み立てる必要がある」と指摘している（上述:149）。1-8行で、Mは自分の経験を語る際に、経験したことの無いZは「はい」と沈黙を用いて反応している。その後、Mとラポール<sup>4</sup>を構築するために、Zが同じ病気を持つ友人に言及し、共通性を示している。ただ、Zは具体的な共通性を明示せず、Mに対する共感的な反応もないため、共感的な反応を示すための、「共感の権利の主張」が見えず、MはZが話題を自分の方に引きつけて、語り始める。従って、Mによる友人の情報を引き出す質問を通して、話題が切り替わったのである。新しい話題をめぐる会話では、自分から発した質問の答えに対して、無難な反応をするMの関心の弱さが伺える。そういった「一問一答」式の会話をする二人は再度に不発に終わってしまう（22行目後の3.4秒）。

その後、Mによる「もうこんなね」（23）では、「これ」ではなく、「こんな」と、個別の言及対象から広げて、Zの友人も自分も含める精神障害の当事者というグループの一員として自己を位置づけている。「一発」（23）という表現を用いて病気のもたらす激変を名詞化し、過去に普通に生活していた自己と現在の罹病した自己が構築されている。またZに対して、「気をつけてくださいね」（23）と、Zを精神障害に罹患したことがない未体験者（ノービス）<sup>5</sup>として位置づけた上で、自らを、精神障害を経験したアドバイザー（エキスパート）に位置づけ、その立場から助言を与えている。ここでは、Mは単に精神障害の当事者としての自身の位置づけを行うだけでなく、相互行為の中で、Zよりも多くの情報や経験を持った者という位置づけを前景化させ、両者に「インタビューとインタビュアー」という位置づけのほかに、自分の方が優位となる立場の不均衡性を構築している。急激に発症するという特性を帯びる病気なので、MはZの将来的な罹患を心配している。Zは「はい」と返答した後、Mはまた、エキスパートの立場からZのことを個別に判断し、「大丈夫」、「芯がしっかりしてそうやから」（26）と形容し、当事者としてのエキスパートの立場からZを罹病の可能性がないと判定し、明確にZを自分とは違う立場にある者として位置づけている。

#### 4.1.2 RQ②に関する分析

次に、RQ②に設定した「発話連鎖が自然・不自然になった原因は何か」を検討してみよう。

<sup>4</sup> 臨床心理学の用語で、カウンセラーとクライアントの間で築かれるべきであるとされている信頼関係を指す。

<sup>5</sup> 秦他（2018）は相互行為によって構築される expert-novice の関係を提示している。

データ1では、ターン・テイキングの際に、沈黙が多く見られ、沈黙の秒数も非常に長い。ターン・テイキングの行われ方から見れば、データ1のコミュニケーションはより不自然であると考えられる。会話の前半では、Mの「喋れなかった」に対し、Zは薄い反応を示している。この後、Zは一連のやりとりを通じて、歩み寄り姿勢が見られるものの、共感的な反応が引き起こされないため、話題が切り替わり、歩み寄りは表層に留まるのである。つまり、Zの薄い反応と、共通性を示すという自分のことを話す行為により、Mの経験が重く受け止められないまま、話が流された。その後、MはZに「気をつけてくださいね」とエキスパートの立場から助言をし、Mは「芯がしっかり」しているから、統合失調症になりえないと判断し、さらに同じ地平に立たせないのである。このように、当事者Mと非当事者Zの間では、相互理解を阻む境界線が動的に作り上げられ、隔たりが語りで顕在化しつつあると考えられる。その隔たりは、当事者のMとZの友人との同一化により、非当事者であるZという2対1の構図が作り出され、Zを排除するものとなってしまう。「あなたとは違う」ことを前提としてやりとりが進み、そのやりとりの端々で見られる「わかるわけがない、だって違うから」という態度を、Mは最後まで崩さないからである。

#### 4.2 データ2の分析

データ2はインタビュアーZがインタビュイーSに対し、当事者同士の関係性に関して聞く場面である。データ2に入る前にSについて補足的な説明をする。Sは社会人入試で日本の通信制大学の福祉学科に入学しており、周りのクラスメートは精神障害のない人々である。学生として学ぶ一方で、Sは複数の当事者団体で積極的に活動している。

##### データ2 当事者同士の関係性を話す（録音の13:47-15:55）

01. Z: でも やっぱりその その健常者たち
02. 健常者と呼ばれる人たちと一緒に大学に行くのは
03. そして (.) [当事者たちと一緒に何か (.) [やるのは
04. S: [ ん [ ん ::
05. Z: どちらのほうが楽か？
06. S: ん :: なんかね ど (.) どちらもすごく バウンダリーっていうか
07. その境界があって 難しいときがあるんですね
08. Z: =でも当事者と一緒に ( )
09. 私から見ればなんか当事者と一緒に何かやるのは (.) ちょっと (.)

10. やりやすい↑ あるいは
11. お互いに気持ちわかってくれると (.) 私は思いますけど ...
12. S: ん
13. Z: でも
14. S: 当事者同士でも =
15. Z: = はい
16. S: ライバル心があったり [ 駆け引きがあったり
17. Z: [@@@ @@
18. S: こいつよりも仕事 (.) たくさん取ったろうとか
19. S: そういう野心 (.) 野心家 [ がいるんですよ
20. Z: [@@ な h る h ほ h ど h
21. S: そういうのに当たると (.) 一緒になると (.) すごく苦勞するんですよ  
(中略)
42. お金の発生する仕事しか行かない人ってい h る h んですよ
43. Z: お (.) お ↑ ∴
44. S: @@@
45. なら h お金の発生しないボランティアとかもあるんですよ 中にはね ↑
46. それには行かないで
47. お金の発生する発表とか
48. 理解啓発のね ↑ ためのなんか 講演とか
49. Z: はい
50. S: そういうのに張り切っていくくせに =
51. Z: = なるほど なんか 当事者同士 [ の 出世 ↑
52. S: [ 当事者同士のなんか交流とか
53. 交流とかいうのね 一切来ない人いるんですよ
54. Z: @@ なるほど
55. S: だからすごいなと思う
56. Z: なるほど
57. つまり 当事者同士でも なんか出世 [ みたいな
58. S: [ そうそうあるんです あるんです
59. すごいですよ ↑ もう
60. S: 知らなかったでしょう [ あるんです h あるんです
61. Z: なるほど [ そうですね

#### 4.2.1 RQ ①に関する分析

まず、RQ ①に設定した「自己（もしくは他者）をどのように位置づけているか、どのような交渉をしているか」をみてみよう。

1-5 行では、Zは大学で障害のない人と団体に所属する当事者との付き合い方を比較してもらい、当事者・非当事者、当事者同士の関係性を尋ねた。「健常者たち、健常者と呼ばれる人たち」(1,2)に注目したい。「健常者」とよく一緒に取り上げられる「障害者」という二分法的な呼び方により、障害の当事者から見れば抵抗を感じうる可能性があると考えられる。Zは「健常者たち」と発話した途端、「健常者と呼ばれる人たち」と自己修復して、「呼ばれる」という受動態の動詞を使用することにより、自分による判断ではなく、一般的に提唱される概念としての「健常者」という言い方をしている。自分で明確に障害者と健常者の間で明確に線引きせず、一般論としての「健常者と呼ばれる人たち」と言い換えることから、Zには、自分の理解と、世間が一般的に提唱しているマスター・ナラティブとしての「健常者」に関する認識<sup>6</sup>とは必ずしもせず、むしろ健常者と障害者の間の境界線を曖昧に捉え、健常者と障害者というカテゴリーの虚構を問い直す姿勢がうかがえる。Zの「どっちの方が楽か」(5)という二者択一の質問に対して、Sは「ん…」と音を伸ばし、考えている様子を見せ、「どっちも」楽とは言えず、両方とも「バウンダリー」が感じられ、難しいときがあると述べている(6)。Sは「健常者」や「当事者」から距離をおき、いずれでもない自己を構築している。

Sの発話に続き、Zはラッチング<sup>7</sup>して、逆接機能を持つ「でも」を用いて、互いの気持ちをわかる当事者同士の連動が「やりやすい」と異論を立てる(9,10)。「私は思いますけど」(11)では、「けど」を用い主張を和らげつつ、Sの述べたことは自分の認識とずれていることとして受け止めていることがわかる。Sは「ん」(12)と反応した後、Zは「でも」(13)を発し、自分の主張を飛び、前にあるSの軌道に戻ろうとしている。それに続き、Sはすぐ「当事者同士でも」(14)と発し、当事者同士の競争関係を含めた複雑な関係性（「ライバル心」、「駆け引き」(16)）があると述べている。Sが語っているとき、Zは「＝はい」(15)と相槌を打ち、発話の産出を促しながら、笑い「@@@」(17)を用い、積極的な反応を示している。続いて、「そういう野心(.)野心家がいるんですよ」(19)では、「その」のような特定の個人だけではなく、「そういう」と一般化し、1つのカテゴリーとしてまとめ、当事者の中の他人よりもっと仕事を取りた

<sup>6</sup> 要田(1999)は日常生活では、障害者の排除を正当化する障害者差別の枠組みがあると指摘している。この枠組みの中核には、人々を健常者と障害者という2つのカテゴリーに分類するための規準、すなわち、健常者/障害者二分法の存在がある。この文脈でのマスター・ナラティブは世間に広まる健常者/障害者二分法のことを指す。

<sup>7</sup> ラッチングは、改行される発話と発話の間が当該の会話の平均的な間の長さより相対的に短いか、間がまったくないことを指す(宇佐美2011)。

い「野心家」というタイプの存在を明示する。また、ここで「のだ」の丁寧形「んです」の使用に注目したい。「のだ」は話し手が認識していたことを聞き手に提示し認識させようとする時に用いられる（日本語記述文法研究会 2003）。また、大曾（1986）は終助詞「よ」の発話機能については、話し手と聞き手の情報や判断の食い違いを前提とし、そこから強調を表す、と指摘している。「いるんですよ」（19）における「のだ」の丁寧形「んです」と「よ」の併用により、Sは自己を、当事者同士の関係性をよく知るエキスパートとして位置づけ、Zに知らないことを認識させていると推測できる。聞き手のZは「野心（。）野心家」を聞いた途端、笑いで反応すると同時に、知らないノービスという立場から「な h る h ほ h ど h」（20）と発し、感嘆を表している。これにより、SとZの、エキスパートとノービスというペアとなる立場の構築が遂行されていると考えられる。続いて、「苦労するんですよ」（21）では、ここでも「のだ」の基本形「んです」が使用され、再びエキスパートの立場からZに当事者同士と一緒に仕事する感覚を認識させている。

22-41行はSの所属する当事者団体の基礎情報についての紹介であり、団体を特定する恐れがあるため、ここでは省略する。42行では、Sは前の語りにもあるように、笑いを伴う「んですよ」を用いつつ、Zに比べて当事者のことをより理解しているエキスパートの立場から状況を説明し、Zに認識させている。それに対して、Zは「お（。）お↑…」（43）と上昇なイントネーションで音を伸ばし、驚きを含めた感嘆を表出し、真剣に受け止めていることが示されている。45-50行では、Sは「お金の発生する仕事しか行かない人」についてさら説明を補足し、Zは「なるほど」と理解を示し、「当事者同士の出世」と自分のことばでSの語りをまとめ、理解したことの立証をはじめている（51）。ただ、Sによる発話はZの発した「出世」という言葉を遮った。Sは「当事者同士」と聞いた途端、前に述べた意味を反復した（53-56）。Zは立証をあきらめず、また57行目で「なんか 出世みたいな」ともう一度「出世」と発した。今回、Sはこのことばに積極的に反応し、「そうそう あるんです あるんです」（58）と納得した様子が見られる。語りを収束する部分で、Sは「知らなかったでしょう」（60）ともう一度エキスパートの立場からこの話題における自分の優位性を確認し、Zも「なるほど そうですね」（61）でノービスとして肯定し、認めたのである。

#### 4.2.2 RQ②に関する分析

次に、RQ②に設定した「発話連鎖が自然・不自然になった原因は何か」を検討してみよう。

データ2では、沈黙が見られず、ラッチング記号「=」を伴う絶え間ない発話、重複

発話が頻繁に観察された。そのため、データ2は発話連鎖がうまくいった例だと考えられる。

こういった一連のやりとりでは、Zは自分の考えとSの考えとの差異を明らかにし、自分は異なる立場、教えてもらうノービスという立場に留まり、未知の知識に対して、感嘆や驚きを表したり、自分のことばでまとめようとしたり、教えてもらう姿勢を示したりしている。Sは、当事者同士についてより理解しているエキスパートとして、Zの考えを是正し、「野心家」に関するスモール・ストーリー<sup>8</sup>を持ち出し、更なる情報を増やし、未知の世界への案内役を担っている。SとZは経験と立場の違いがあるものの、無理やり共通性を求めず、むしろ差異を浮き彫りにし、エキスパートとノービスというペアとなる関係性を確認し合い、その場でインタラクションを行い、比較的円滑なコミュニケーションを成り立たせる。また、Zは会話の開始部ですぐに「健常者と呼ばれる」と自己修復し、この姿勢を目の前の人に表出することで、相手の抵抗感を減らし、インタビュイーを尊重する試みをしていると考えられる。

## 5 考察

本章ではデータ1とデータ2の分析結果をもとに、3つのRQについて考察する。

まず、RQ①について見ていく。今回の分析を通して、データ1とデータ2では、どちらも当事者と非当事者がエキスパートとノービスというペアとなる位置づけが見出された。データ1では、Mは、精神障害に罹患したことがないノービスとしてZを位置づけた上で、自らを、精神障害を経験したエキスパートに位置づけ、助言をしている。また、当事者としてのエキスパートの立場からZを罹病の可能性がないものと判定し、Zを自分とは違う立場にある者という位置づけを前景化させている。それにより、「優位性を持つエキスパート」としてのMが表出されることとなった。Mの語りを前に、Zは幾度も沈黙を示している。その後、Zは共通性を提示したものの、共感が引き起こされず、結果的に、「到底当事者の苦痛がわからないノービス」というZが構築されてしまった。データ2では、SとZはそれぞれ、新しい情報を相手に認識させる「～んです」と、理解を表明する「なるほど」を交わし、「教えるエキスパート」「教えてもらうノービス」という均衡的といえる立場を構築した。

次に、RQ②について考察を行う。全体的に、ターン・テイキングの行われ方から見れば、データ1のコミュニケーションはより不自然で、データ2は発話連鎖がうまくいっ

<sup>8</sup> イエルガコポロ (2013:24) はスモール・ストーリーを、現在進行中の出来事、未来や仮定の出来事、語りを据え置くこと、また語るのを否定することなど、「会話の文脈において頻度が高く、目立つナラティブ行動の全域を捉える包括的な用語」とであると定義している。

た例だと考えられる。データ1では、Zは共感を引き起こすため、「も」を込めた「友達も」を持ち出し、共通性を提示し始めている。しかし、それに対し、Mは薄い反応を示し、Zによる歩み寄りとは表層にとどまり、共通性を提示することは結果的に先行研究の黒嶋（2013）のいう当事者の「経験の固有性」を損ねる行為になってしまい、発話連鎖が不自然になってしまったのである。一方で、データ2で、ZとSは前述の「教えてもらうノービス」と「教えるエキスパート」といった立場に立ってやりとりをし、二人の経験と立場の差異をはっきりと表出させている。例えば、異議をはっきり立て、自分の考えた状況との対比を述べることなどがあげられる。異なる立場に留まることによって、病気のエキスパートである当事者の語りへの尊重が表れた。また、データ2では、「健常者と呼ばれる人たち」などの言い換えにより、慎重でありかつ尊重した態度を示し、この場の在り方を提示している。要するに、相手を尊重した態度で、差異を表出することが円滑なコミュニケーションに導いたのではないかと考えられる。

最後に、RQ①とRQ②についての分析を踏まえ、RQ③を考察する。NBM<sup>9</sup>を提唱するローナー（2005）は精神医療の臨床におけるNBM実践について、Curiosity（好奇心）とCaution（慎重性）の重要性を唱えている。すなわち、患者について「知らない」という無知の意図的な姿勢を保ち、患者から教わろうとする、そしていつも異なった見方を持つ。それと同時に、患者を全人的に理解しようとするあまり無遠慮に患者の領域に立ち入ってしまっただけとはいえないことである。本研究のデータ分析を通して、類似した示唆が見出されたものと考えられる。医療という制度的な場面であっても、当事者と非当事者同士のコミュニケーションであっても、同質性を見出し、安易に相手との共感を引き起こそうとすることより、好奇心を持つノービスの立場に立って、言語行動・非言語行動を用いて積極的に反応し、障害や病気、そして当事者同士の関係性について詳しいエキスパートである当事者を尊重することで、聴く姿勢が求められるのではないかと考えられる。同時に、「健常者と呼ばれる人たち」のような言い換えが映したように、相互行為を行う中、当事者を尊重する場の場づくりに尽力していることを相手に見せることも重要だと考えられる。

## 6 まとめ

本研究は精神障害の当事者と非当事者によるインタビュー・ナラティブを分析対象とし、発話連鎖が不自然になってしまったと思われる例と、連鎖がうまくいったと思われる例を取り上げ、ポジショニング（位置づけ）という概念を用い、会話参加者らの交渉

<sup>9</sup> Narrative-Based Medicine（ナラティブに基づく医療）の略語で、医者は患者のナラティブに耳を傾け、新しいナラティブを創造していく医療のことである（斉藤 2005）。

するプロセスを分析・比較した。その結果、医療という制度的な場面でなくとも、相互行為の場で、共通性を見出し、むやみに共感することより、当事者の経験を尊重する相互行為の場を作り、相手の経験に好奇心を持つノービスの立場に立って、病気のエキスパートである当事者の語りを慎重に聴くという非当事者の姿勢が示唆された。そこで、本研究が当事者と非当事者を架橋するコミュニケーションの促進の一助となることを願う。

書き起こしに用いた記号

|                |               |          |
|----------------|---------------|----------|
| (n.m) 1 秒以上の沈黙 | : 直前の音の引き延ばし  | (.) 小休止  |
| @ 笑い (個数は長さ)   | h 呼気音 (個数は長さ) | ... 言い淀み |
| ↑ 直後の音の上昇      | [ オーバーラップ開始   | = ラッチング  |

## 参考文献

- アレクサンドラ・イエルガコポロ (2013) 「ナラティブ分析」 佐藤彰・秦かおり・岡本多香子訳、佐藤彰・秦かおり (編) 『ナラティブ研究の最前線：人は語ることで何をなすのか』 ひつじ書房、pp.1-42.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』、スリーエーネットワーク.
- 岩田夏穂 (2013) 「第7章 飛び越えの技法 - 「でも」とともに導入される共感的反応」 西阪仰・早野薫・須永将史・黒嶋智美・岩田夏穂 (編) 『共感の技法 - 福島県における足湯ボランティアの会話分析』 勁草書房、pp.141-156.
- 宇佐美まゆみ (2011) 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2011 年版」 <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj2011.pdf>
- 浦河べてるの家 (2002) 『べてるの家の「非」援助論』、医学書院.
- 大曾美恵子 (1986) 「誤用分析 1 『今日はいい天気ですね。』 - 『はい、そうです』」 『日本語学』 9 月号、明治書院、pp.91-94.
- 片岡三佳・野島良子・豊田久美子 (2003) 「精神分裂病者が語る入院体験：現象学的アプローチを用いて」 『日本看護研究学会雑誌』 Vol.26 (5)、pp.31-44.
- 川岸洋美・市山加奈恵・中田伸代・筒口由美子 (2002) 「精神分裂病患者の入院体験から学ぶ看護：当事者の語りを通して」 『富山医科薬科大学看護学会誌』 Vol.4 (2)、pp.137-147.
- 北村育子 (2004) 「病いの中に意味が創り出されていく過程：精神障害・当事者の語りを通して、構成要素とその構造を明らかにする」 『日本精神保健看護学会誌』 Vol.13 (1)、pp.34-44.

- 黒嶋智美 (2013) 「第 8 章 経験の固有性を認める共感」西阪仰・早野薫・須永将史・黒嶋智美・岩田夏穂 (編) 『共感の技法 - 福島県における足湯ボランティアの会話分析』勁草書房、pp.127-139.
- 斎藤清二 (2005) 「EBM と NBM」『医学の歩み』 vol.214、pp.1018-1019.
- 桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』、せりか書房.
- 全国精神障害者家族連合会・全国精神障害者団体連合会 (1993) 『こころの病—私たち 100 人の体験』、中央法規出版.
- 田中美恵子 (2000) 「ある精神障害当事者にとっての病に意味：地域生活を送る N さんのライフストーリーとその解釈」『看護研究』 Vol.33 (1)、pp.37-59.
- 谷中輝雄・藤井達也 (1988) 『心のネットワークづくり—やどかりの里の活動ループ』、松籟社.
- 西阪仰 (2013) 「第 7 章 飛び越えの技法 - 「でも」とともに導入される共感的反応」西阪仰・早野薫・須永将史・黒嶋智美・岩田夏穂 (編) 『共感の技法 - 福島県における足湯ボランティアの会話分析』勁草書房、pp.113-126.
- 日本語記述文法研究会 (2003) 『現代日本語文法 4: 第 8 部モダリティ』、くろしお出版.
- 秦かおり・砂川千穂・菊地浩平 (2018) 「Beyond the Gap —コミュニケーションにおける「異なり」はどう処理されるのか—」『社会言語科学』 第 20 巻第 2 号、pp.28-33.
- ホルスタイン・ジェイムズ / グブリアム・ジェイバー (2009) 『アクティブ・インタビュー - 相互行為としての社会調査 -』、山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行 (訳)、せりか書房.
- 松田康子 (2018) 「精神障害者当事者の経験に着目した質的研究に関する批判的検討：障害者臨床心理学の着想」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』 132、pp.149-165.
- 宮坂道夫 (2020) 『対話と承認のケア：ナラティブが生み出す世界』、医学書院.
- 森岡正芳 (2017) 「ナラティブが必要な時 —臨床実践と研究で—」『広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要』 第 16 巻、pp.1-8.
- 要田洋江 (1999) 『障害者差別の社会学—ジェンダー・家族・国家』、岩波書店.
- 吉田おさみ (1980) 『狂気からの反撃』、新泉社.
- ローナー・ジョン (2005) 『ナラティブ・ベイスト・プライマリケア—実践ガイド』、山本和利 (監訳)、診断と治療社.
- Bamberg, M. (1997). Positioning between structure and performance. *Journal of Narrative and Life History*, 7, pp.335-342.

- Davies, B. and Harré, R. (1990). Positioning: The discursive production of selves. *Journal for the Theory of Social Behavior*, 20, pp.43-63.
- Heritage, J. (2011). Territories of knowledge, territories of experience: empathic moments in interaction. In T. Stivers., L. Mondada & J. Steensig (eds.), *The morality of knowledge in conversation*, 159-183. Cambridge: Cambridge University Press.

